

2014 年度 UCRC 研究員プロジェクト活動実績報告書

氏名	木戸 紗織
(プロジェクト・テーマ名) ルクセンブルク学研究会	
(研究活動実績) <p>今年度も従来の活動を継続し、研究発表会の開催、および論文集『ルクセンブルク学研究』第 5 号の刊行を行った。詳細は以下の通り。</p> <p>< 第 14 回研究発表会 > 日 時：11 月 9 日（日）13 時半～17 時半 場 所：西宮市大学交流センター 発表者：石部尚登『方言』の書記化：ワロン語正書法の歴史から 柴崎隆「いわゆる“ライン方言（Reinisch）”の言語的特徴 —ケルン方言を中心に— 田原憲和「アントワープ・マイヤーはルクセンブルク語をどのように見ていたか」 田村建一「ルクセンブルク語北部方言の特徴」</p> <p>今年度の研究発表会は、ベルギー研究会と合同で行った。ルクセンブルクとベルギーは互いに強いつながりを持つ隣国であり、複数の公用語を持つ多言語国家としても共通点を持つ。しかし、ベルギーでは各言語の使用域が分かれているのに対し、ルクセンブルクではすべての言語が地域の別なく話されており、実際の言語状況は大きく異なっている。そこで、両研究会から発表者を 2 名ずつ出し、互いの事例について理解を深めるとともに、両者の共通点、相違点について議論した。とくに興味深かったのは、都市の多言語性が、ルクセンブルクでは経済面を中心に都市の活性化の原動力となっているのに対し、ベルギーでは国家分裂の要因となっている点である。この多言語性が持つ「求心力」と「遠心力」について、双方の立場から、さらには日本人としての立場から比較検討がなされた。さらに、この合同研究会を通して研究者間のネットワークを広げ、今後の共同研究の可能性を探ることが第 2 の目的であったが、時間的に議論しきれなかった点を次回に引き継ぎ、続けて情報交換を行うこととなった。現在、次回研究会を 5 月ごろ開催する方向で調整している。</p> <p>< 『ルクセンブルク学研究』第 5 号 > 論文 1 編、研究ノート 1 編が提出され、現在校正中である。このうち論文は、上記の合同研究会をきっかけとして投稿されたものである。例年に比べると掲載本数が減っているが、合同研究会の際、本プロジェクトの活動を紹介する上で当論文集が大変有効であったことから、ルクセンブルクに関する研究成果を広く公開する場として論文集の重要性を再確認した。今後も継続して刊行し、編集のみならず、積極的に投稿するよう努めたい。</p>	